

新シリーズ連載開始

# 『看る』ということ

～看護師の私は何をする人ぞ～

株式会社N・フィールド 居宅事業本部 教育専任室

精神看護専門看護師 **中村 創氏**

今月号から新シリーズ『看る』ということと看護師の私は何をする人ぞ〜がスタートします。執筆者は、2019年3月末まで医療法人資生会千歳病院に勤務し、4月から株式会社N・フィールドに籍を移して活動する精神看護専門看護師の中村創氏です。日々多忙な看護の現場では、「自分の看護を振り返る時間」がなかなか持てず、流れている現状もあるかと思えます。施設によっては、研修など、さまざまな機会を捉えて「振り返り」に取り組んでいるところもあります。経験年数に関わらず、専門職である看護職一人一人が日常の看護実践の中において、「ふと、今の自分の看護を振り返る瞬間」が持てれば、そして、それを仲間と共有することができれば、看護はさらに深まっていくと考えます。そうした「気づき」を得るヒントを中村氏から学んでいきたいと思えます。

何が看護で、何が看護ではないのか―「看る」ということを考える

1. はじめに

「どうして私は今ここにいるのか」臨床にいとそう感じることもあるでしょうか。あるいは「そんな考えは忙しい日常に押し流されてどこかに行ってしまった」という方もいらっしゃるでしょうか。臨床では絶え間なく時間が流れています。私たちはその流れにしがみついただけで精一杯です。考える暇もありません。ただ、だからといって考えないわけにはいきません。考えないと提供する看護の目的を見失うからです。看護の目的を見失うということは正しく看護を提供できないことを意味します。

私たちは看護師です。看護師である以上提供するサービスは「看護」でなければなりません。逆に言う「看護でないものを提供してはいけないのです。自動車を大金で購入し、支払いが済んだ後に自転車が届けられたら誰でも「詐欺だ」と憤慨するでしょう。同様に看護でないものを「看護です」と言って提供することも詐欺です。こうなら

# シリーズ『看る』 ということ

～看護師の私は何をする人ぞ～

第1回

## 目的とは何か



株式会社N・フィールド  
居宅事業本部 教育専任室  
精神看護専門看護師

中村 創氏

### 2. 「看る」と切感の関係

ないためには「何が看護で、何が看護でないか」を知っていないければなりません。では看護とは何なのでしょう。か。「看る」とはどのような行為をさすのでしょうか。本連載はその問いについて考えることを第一の目的にしています。読者の皆様も一緒に考えていただければ幸いです。

「看」という字には、対象をよく見る、見守る、という意味があります。松木(1998)は「看」という字は「手」を「目」の上に乗っていった形であり、それは病人の額に手を当てて熱の有無を診る看取りの典型的行動様式<sup>\*)</sup>、と述べています。どちらの場合であ

れ、その行為は「みる」対象がいることに他なりません。言うまでもなく看護の対象は人間です。ですから、看護には「相手となる人間をじっくり見る」という意味があります。冒頭でも触れましたが、しかし臨床では絶え間なく時間が流れています。そういった環境下で私たちは相手をじっくり見ることができていますでしょうか。個人の体験を話させていただきましたと、そうではない現実がありました。何がじっくり見ることを妨げていたのでしょうか。

その人が成長すること、  
自己実現すること  
助けること

要因の一つは切迫感です。私は常に何かに追われていました。例えば記録であったり、ナースコール、医師の指示、配薬、処置、食事介助、気がつけば「もうこんな時間？」を毎日繰り返していました。もちろん一つ一つ大切な業務でした。ところが、肝心の「相手をじっくり見る」を犠牲にしていました。病院は交代制ですから次の勤務帯までに終わらせておかなければならぬ業務が常に存在します。終わらせないとどうなる

か、それは次に控える勤務帯のスタッフが迷惑をこうむることを意味します。それが少しきつめの先輩であったなら、そう考えたら何を置いても終わらせることが優先されました。

そこには「看護とは、対人関係のプロセス<sup>※2</sup>」という言葉や「一人の人格をケアするとは、最も深い意味で、その人が成長すること、自己実現することをたすけること<sup>※3</sup>」という言葉はありませんでした。少なくとも切迫感を抱え臨床に立っていた私の頭にはまったくありませんでした。

しかし、これらの言葉こそ看護を構成する主要な要素なのです。まったく頭になかった私は看護を提供できていませんでした。相手をじっくり見ていなかったわけですから相手が援助において何を求めているかもわかっていなかったのです。

## 「生まれ・見よ・そして

### 耳を傾けよ」の信号

#### 3.ズレ(不一致)について

ところで、同僚と子育ての話しになった時、興味深い話を聞くことができました。その同僚のお子

さんはむしゃくしゃしていたらしくプラスチックのコップをわざと投げたというのです。甲高い破裂音がしました。すぐに厳しく注意したそうです。お子さんも納得した様子だったとのことでした。また別の日に今度は誤って同じくプラスチックのコップを落とし、やはり同じような音がしました。お子さんは落とした直後に「ママごめんね」と、とても申し訳なきようにしていたそうです。同僚は胸が苦しくなったと話していました。

同僚は「ものに当たるのは良くない」という意図でお子さんに注意しました。ところがお子さんは「コップの音を立てるのは良くない」と認識していました。同僚の意図とお子さんの認識にはズレがあったのです。臨床にも同じ種類のズレがあります。ウィーデンバック(1964/1984)はこの「ズレ(不一致)」は「生まれ・見よ・そして耳を傾けよ」の信号<sup>※4</sup>と教えてくれています。

#### 4.ズレを発見したら

臨床で出会うズレにはどのようなものがあるでしょうか。生活指導を受けるために入院している糖尿病患者さんが隠れて間食してい

る場面に遭遇した、人工骨頭置換術を受けたばかりの人が立っている場面に遭遇した、などがあるでしょうか。すぐにも「何をしているの」と叱責したくなる場面に結びつかないことを私たちはなんとなく知っています。

### 「ズレ」は、考えを深める

#### チャンスであり、

#### 両者の関係を深める機会

先に紹介したウィーデンバックは看護師が臨床で持つべき目的について「ある個人がへ援助へのニード<sup>※5</sup>として体験しているニードを満たすこと<sup>※6</sup>」と述べています。つまり患者さんが援助を求めている部分のニードを満たすことが看護師の目的だ、というのがズレにはこの目的達成のためのヒントが隠れていることが多いです。先ほどの同僚の話であれば、胸が苦しくなった時こそズレを発見できた瞬間だったわけですから。その時に「間違っちゃったのはいいのよ。ママは怒ってないから。この前と何が違ったか考えてみましょう」と返したらならきつとお子さんは何がいけなかったのか、より深く考えることがで

きたでしょう。ですからズレはいけないことではなく、むしろより深く考えることができるチャンスなのです。同時に両者の関係を深める機会でもあります。まずズレを発見した際は、立ち止まり、よく見て、相手の言動に耳を傾けてみてはいかがでしょうか。きつとそこに目的を達成するためのニードが隠されています。

#### 引用参考文献

- ※1 松本光子。(1998). 松本光子(編), 看護学概論―看護とは。看護学とは―(p.2). 廣川書店
- ※2 Travelbee, J. (1971/1974). 長谷川浩, 藤枝知子(訳), トラベルビー人間対人間の看護。(p.3). 医学書院
- ※3 Maycroft, M. (1971/1998). 田村真, 向野宣之(訳), ケアの本質 生きるこの意味。(p.13). ゆるみ出版
- ※4 Wiedenbach, E. (1964/1984). 外口玉子, 池田明子(訳), 臨床看護の本質―患者援助の技術 第2版。(p.69). 現代社
- ※5 Wiedenbach, E. (1964/1984). 外口玉子, 池田明子(訳), 臨床看護の本質―患者援助の技術 第2版。(p.29). 現代社